

平城京東市跡推定地の調査 XII

第14次発掘調査概報

奈良市
考古学
研究会

奈良女子大学蔵書



99108095100X

平成 6 年

奈良市教育委員会

210.2

99

(表紙)

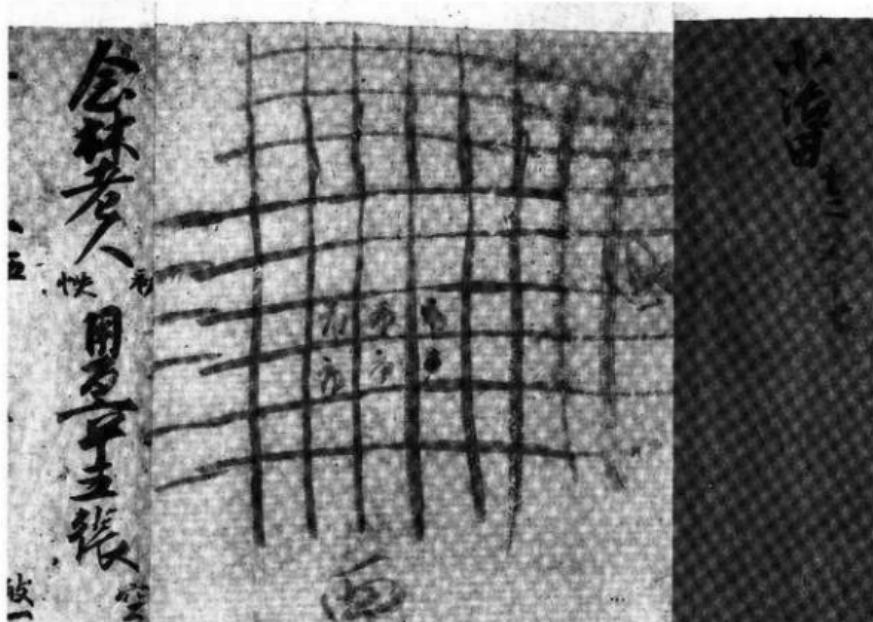


fig. 1 平城京市指圖（淨土宗總本山知恩院所藏『写経所紙筆授受日記』紙背）

序

私たちの住む奈良市には、今から1250年ほど昔、和銅3年（710年）に国都平城京が置かれました。都の中には東西2箇所に官営市場が置かれ、現在の西九条町から杏町一帯にかけて東市が設けられ、たいそう騒わっていたようです。現代社会に生きる私たちにとって経済活動がなくてはならないように、当時の人々にとって物流の拠点である市は、私たちが考える以上に重要な場所であったと思われます。

こうした市の遺跡を調査研究することが、奈良時代の人々の経済活動を知る上で、必要不可欠であることは言うまでもありません。

現在、東市推定地は市域の中でも比較的よく水田が残っている地域であります。近年周辺では徐々に宅地化が進み、東市推定地にもその波がおしよせようとしております。こうしたなか、地下に眠る遺産を後世に伝えることが、私たちの責務であると考えているところです。

最後に、本調査にあたりまして、多大な御理解と御協力を頂きました土地所有者の吉松茂信氏をはじめ、地元の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げる次第です。

平成6年3月

奈良市教育委員会

99108095

教育長 久保田 正一

例　　言

- 本書は平成5年度に実施した、平城京東巾跡推定地第14次発掘調査の概要報告である。
- 調査次数、調査期間、面積及び調査地番は下記のとおりである。
第14次調査 平成5年11月12日～12月27日 460m² 奈良市杏町580番地の1
- 調査は奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター（課長 安田龍太郎 センター所長 榎本健司）が実施した。現地調査は技術吏員 秋山成人が担当し、庶務は主任杉村武司が担当した。調査補助員として、藤井健太（奈良教育大学）君が参加した。
- 調査にあたっては土地所有者である吉松茂信氏の御理解と御協力をいただいた。記して感謝致します。
- 本書の作成にあたっては奈良国立文化財研究所、浄土宗總本山専恩院から写真、地図の提供をいただいた。記して感謝致します。
- 本書の執筆はI、II-1、2、3の一部とIIIを秋山成人が、II-3を中島和彦、宮崎正裕が分担した。
- 本書の編集は秋山成人が行なった。

目　　次

Iはじめに.....	1
II調査成果	
1層位.....	3
2検出遺譲.....	3
3出土遺物.....	6
IIIまとめ.....	7

図版目次

fig. 1 平城京市指図	表紙裏	fig.10 調査区全景（南から）	8
fig. 2 平城京条坊と 東市位置図（1/75,000）	1	fig.11 調査区全景（北から）	8
fig. 3 市域推定地周辺の 条坊と調査位置図（1/5,000）	2	fig.12 調査区全景（西から）	9
fig. 4 東市推定地調査一覧表	2	fig.13 調査区全景（東から）	9
fig. 5 調査区東壁上層断面図（1/100）	3	fig.14 溝SD215（南西から）	10
fig. 6 井戸S E226平・断面図（1/50）	4	fig.15 北東拡張区八条条路南側溝 SD001（東から）	10
fig. 7 遺構平面図（1/300）	5	fig.16 北西拡張区八条条路南側溝 SD001（西から）	10
fig. 8 井戸S E226出土土器 (1~9 ¼, 10~11 ¼)	6	fig.17 建物S B208（南から）	11
fig. 9 井戸S E226出土軒丸瓦 (平城宮7247A ¼)	7	fig.18 土坑S K221（北から）	11
		fig.19 井戸S E226（東から）	11

I はじめに

調査の契機 平城京内には左京に東市、右京に西市と二箇所の政府管轄の市が設けられ、物流の拠点としての役目を担っていた。このうち東市の所在地については京都知恩院所蔵の写経所関係文書紙背の「平城京市指図」(fig. 1) 及び「薬師院文書」等から左京六条三坊に比定され、市域の範囲を五・六・七・十・

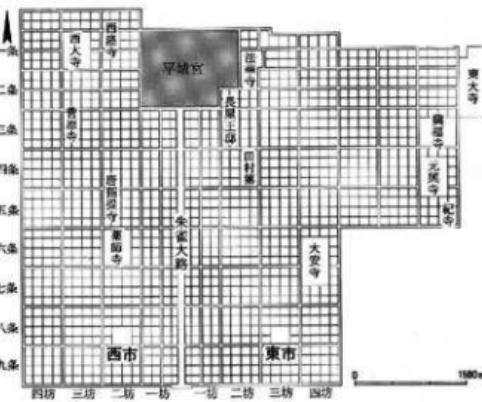


fig. 2 平城京条坊と東市位置図 (1/75,000)

十一・十二坪の六坪とする説と五・六・十一・十二坪の四坪とする説がある。現行の行政区画では東市推定地が奈良市、西市推定地は大和郡山市域にあることから、奈良市教育委員会では東市推定地について、昭和56年度から国の補助金を受け範囲を確認すべく調査を継続している。発掘調査開始当初と比較すると、推定地の北を東西に通る市道が整備され、昭和60年に市街化区域に編入されたことにより、推定地周辺の宅地化が進みつつある。こうした状況から、早急な対策が望まれるところであり、14次にわたる継続調査の意図もこの点にある。

これまでの成果 昭和56年度以来実施してきた調査の結果、推定地の北で、八条条間路、東で、十一・十四坪坪境小路、西で、三・六坪坪境小路を検出している。推定地内では三坊を縦貫する東三坊間路、五・六坪坪境小路、十一・十二坪坪境小路を検出し、推定地北半の条坊道路の位置を明らかにした。六坪では西、東、北面の築地痕跡、縦柱建物を含む掘立柱建物を検出し、さらに八条条間路と推定地を南北に縦貫する東掘川の交差部に架かる木橋を検出している。以上により、推定地内は坪ごとに道路で区画され、それぞれの坪は築地でとり囲まれていたと思われ、さらに十一坪を東掘河が縦貫し、六坪の中央には遺構のない空地が広がることもわかりつつある。しかしこれらの遺構が東市の遺構であるか、明確な根拠を得るまでには至っていない。また第1次～第7次調査は推定地北半の条坊道路の確認に主眼を置き、第8次調査以降は、推定地北西の坪である六坪の様相を明らかにすることを目的に調査を行なってきた。今回の調査も、坪内の調査面積を拡大することが市域の解明につながると考え、第13次調査の東に隣接して行なった。



fig. 3 市域推定地周辺の条坊と調査位置図 (1/5,000)

調査次数	調査期間	調査地番	面積	調査次数	調査期間	調査地番	面積
第1次	昭和57年2月15日～3月30日	杏町583-1	240m ²	第8次	昭和62年10月21日～12月25日	杏町586 581-1	290m ²
第2次	昭和57年4月20日～8月7日	東九条町 441-1	240m ²	第9次	昭和63年11月24日～平成元年1月11日	杏町580-1	300m ²
第3次	昭和57年5月19日～6月24日	東九条町 493-1 444	125m ²	第10次	平成2年1月17日～3月20日	杏町580-1	410m ²
第4次	昭和58年4月20日～6月24日	東九条町 441-1 442-1-2	220m ²	第11次	平成2年11月5日～12月28日	杏町579-1	410m ²
第5次	昭和59年11月9日～12月26日	東九条町445	510m ²	第12次	平成3年10月14日～11月22日	杏町579-1	300m ²
第6次	昭和60年11月19日～61年3月19日	東九条町437 438	600m ²	第13次	平成4年11月10日～12月18日	杏町580-1	449m ²
第7次	昭和61年11月4日～62年1月22日	杏町592	340m ²	第14次	平成5年11月12日～12月27日	杏町580-1	460m ²

fig. 4 東市推定地調査一覧表

II 調査の概要

1 層序 調査区内の層序は現地表から暗灰色土(耕作土)、赤褐色土(床土)、淡灰色土(旧耕作土)の順で、以下、茶灰色砂質土、暗灰色土と続き地表下0.4mで淡黄灰色粘土の地山に達する。調査区の北西隅と北辺では淡黄灰色土の上面に暗褐色砂が堆積する。遺構は淡黄灰色粘土及び暗褐色砂上面で検出した。遺構検出面の標高はほぼ58.0mで、北東から南西へ向かってわずかに傾斜している。

2 検出遺構 調査区は六坪内の北辺東寄りに位置する。検出した遺構には奈良時代、平安時代、時期不明のものがある。

奈良時代の遺構 奈良時代のものには溝S D001・216、建物S B204・217・208、土坑218・219・220・221・222、不明遺構S X223がある。

S D001 調査区北拡張区で検出した幅1.5m、深さ0.3mの溝で、八条条間路南側溝である。第1・11次調査で、坪の東、西を限る小路側溝との接続部を検出している。

S D216 南側溝S D001と心々で3.5m隔てて平行する幅1.5m、深さ0.3mの素掘りの溝で、第11次調査区から続く。埋土は褐色土で、8世紀の土師器、須恵器が出土。

S B204 衍行3間(8.85m)以上、梁間2間(5.9m)の東西棟建物。第13次調査で、南側柱列を検出している。柱間寸法は衍行、梁間ともに2.95m等間。重複関係から建物S B217より新しい。

S B217 東西2間以上、南北2間の総柱建物。柱間寸法は東西、南北とともに1.2m等間である。柱掘形は後後にかなり削平を受け、深さ0.05mと浅い。

S B208 東西3間(4.1m)、南北3間(4.5m)の総柱建物。第13次調査区で東西3間、南北2間分を検出している。柱間寸法は東西が1.3-1.5-1.3m、南北は1.5m等間である。棟方向が国上方眼方位に対し若干西へ振れる。

S K218・219・220 南北0.65~0.85m、深さ0.09~0.24mの平面不整形掘形の土坑。埋土は土坑S K218・220が茶褐色土、土坑S K219が茶灰色土である。遺物はともに8世紀の土師器、須恵器が出土。重複関係から土坑S K218は土坑S K219より古いことがわかる。

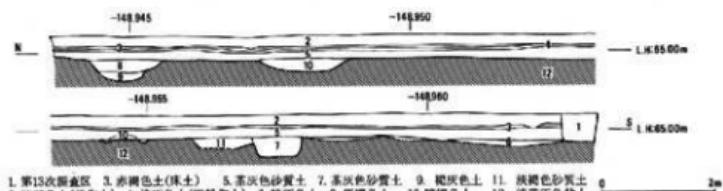


fig. 5 調査区東壁土層断面図(1/100)

S K221 東西1.24m、南北2.3m、深さ0.36mの平面長円形掘形の土坑。埋土は茶灰色土で、8世紀の土師器甕C、須恵器杯A、杯B、壺が出土した。

S K222 東西1.2m、南北0.9mの平面不整方形掘形の土坑。埋土は茶灰色粘砂で8世紀の土師器、須恵器の小片が出土した。

S X223 調査区北東隅で単独で検出した一辺1.0m、深さ0.45mの平面隅丸方形掘形の遺構。柱穴とも考えられ、調査区外東へ柱筋が続く可能性はあるものの、柱痕跡もなく詳細は不明である。埋土は灰色粘質土で、8世紀の土師器の小片が出土した。

平安時代の遺構 平安時代のものには建物S B224・225、井戸S E226がある。

S B224 衍行3間(6m)以上、梁間1間(3.65m)の東西棟建物で南、北に廊が付く。柱間寸法は衍行が2m等間、廊の出は2mである。

S B225 衍行3間(8.2m)、梁間2間(4.6m)以上の東西棟建物。柱間寸法は衍行が東から3.2-2-2.8m、梁間は2.3mである。柱掘形から墨色土器の小片が出土した。

S E226 径1.5m、深さ2.2mの平面円形掘形の井戸。掘形の底に径0.4~0.55mの円形曲物を3段据え、その上に内法東西0.76m、南北0.72m、高さ0.52m以上の方形縦板組横棧留の枠を組む。枠内から黒色土器が出土した。

時期不明の遺構 時期不明のものには建物S B227溝S D215、土坑S K228~236がある。

S B227 衍行3間(5.4m)、梁間2間(3.7m)以上。柱間寸法は1.7~2.5mと不揃いで、柱掘形の径が0.25mと小さく、棟方向も北で西へ振れる。

S K228 幅2.1m、深さ0.38mの平面不整形の土坑。埋土は淡黄褐色砂質土。遺物が出土せず、時期は決めがたいが、重複関係から溝S D216より新しく、建物S B224よりも古いことがわかる。

S D215 幅1.2m、深さ0.15mの斜行溝。第13次調査区に続く。埋土は茶褐色土で、遺物は出土しなかったが、弥生時代の遺構の可能性がある。

S K229~236 東西1.6~3.0m、南北0.85~2.4mの平面不整形掘形の土坑。埋土は褐色砂質土で遺物は出土しなかったが、斜行溝S D215に沿うことから、弥生時代の可能性がある。

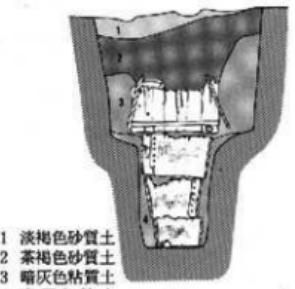
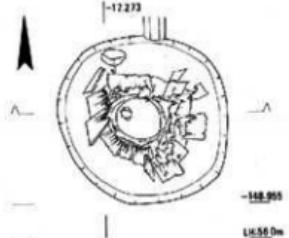


fig. 6 井戸S E226平・断面図 (1/50)

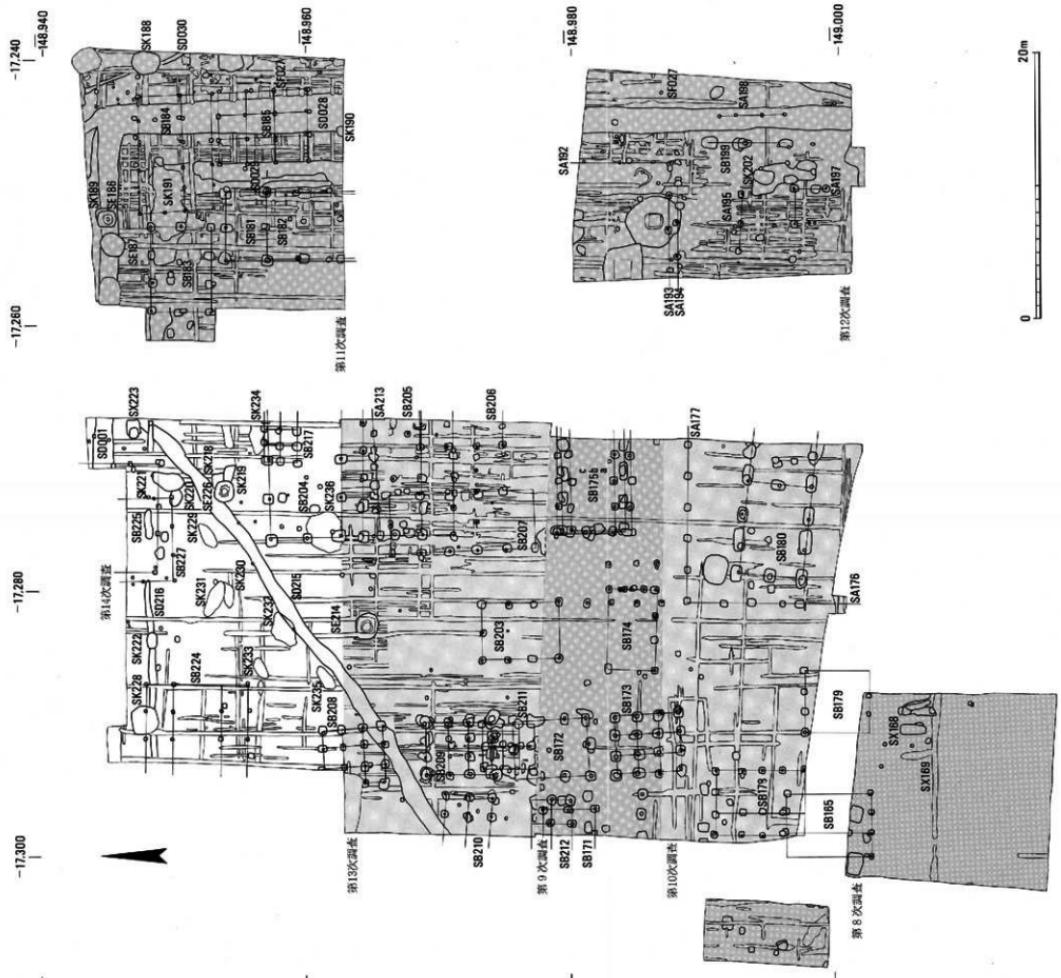


fig. 7 边坡平面图 (1/300)

3 出土遺物 遺物整理箱で、6箱分の土器と瓦が出土した。このうち土器は3箱分と比較的少ない。平安時代の井戸SE226から良好な一括資料が出土しており、これと瓦類について報告する。

SE226出土土器には土師器皿（1）・羽釜（8・9）・竈（10・11）、黒色土器△類椀（2～5）、須恵器杯（7）・壺・甕、灰釉陶器皿（6）・壺がある。遺物整理箱1箱の土器が出土した。土師器皿は薄手で口縁端部を上方へ積み上げる。竈は曲げ箱の竈で、焚口両側の脚部の破片である。粘土紐を積み上げて体部を作った後に径2～3cmの粘土紐を貼付し脚を作る。粘土紐接合痕から、口縁部から底部に向って体部を作った後、脚部を貼付し倒立させたと考えられる。黒色土器△類椀には高台が高いものと低いものがある。いずれも体部外面はヘラケズり後粗いヘラミガキをし、内面は緻密なヘラミガキをする。灰釉陶器皿は高台部と見込み部には施釉しない。10世紀中頃のものと考えられる。

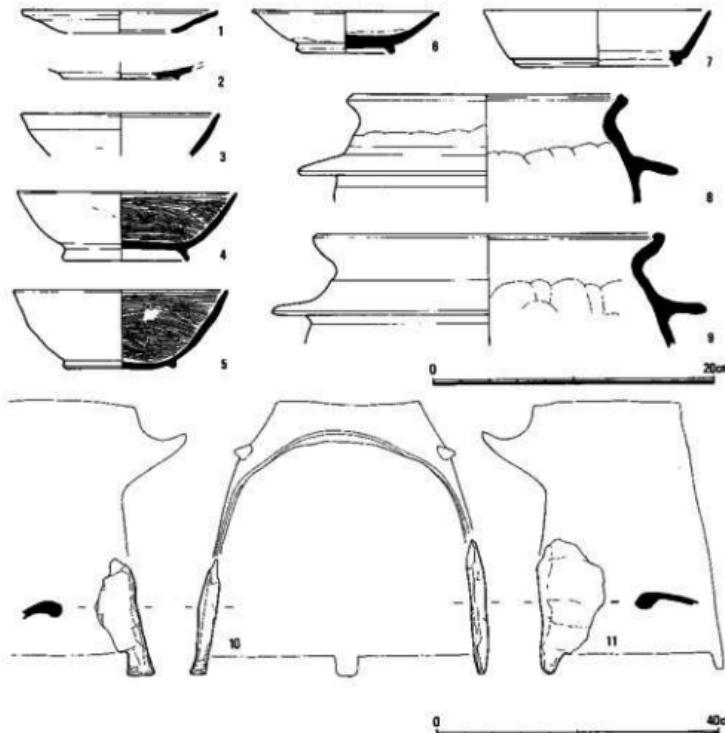


fig. 8 井戸SE226出土土器（1～9）、10・11

瓦は遺物整理箱で3箱分ある。大半が丸瓦、平瓦の細片で、井戸S E226枠内・枠外、上坑SK219、SK221、溝SD001、遺物包含層から出土している。軒瓦は軒丸瓦2点のみで、SE226枠内と枠外から1点ずつ出土した。2点とも残り只今は悪いが、同范品で、平城宮7247型式A種に分類できる。平安時代初頭のものである。複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、独立した開弁をもち、突出した中房には1+6の蓮子を置く。外区は内縁に珠文が27個めぐり、外縁は素縁である。同范品は東市跡推定地のこれまでの調査では第4次の大振河(S D017)から3点、第10次の掘立柱建物(S B173)の柱抜取り痕跡から1点出土している。東市跡推定地の北東に隣接する姫寺所用瓦と考えられる。

IIIまとめ

今回の調査成果をまとめると以下の3点となる。

- (1) 奈良時代の遺構については総柱建物SB208→総柱建物SB217→建物204と変遷があることがわかる。総柱建物はこれまでの六坪内の調査成果を合せ、遺構の規模が比較的小さいにもかかわらず、奈良時代を通じて数棟が存在する。このことは他の坪の調査例に比して特徴的である。
- (2) 平安時代の遺構では建物SB224・225、井戸SE226を検出した。これまでに、第6次、第13次調査で、平安時代初めの遺構を検出し、多量の遺物が出土している。さらに、第11次調査で、鎌倉時代の遺構や遺物を検出していることから、9世紀から10世紀にかけて六坪及びその周辺が利用され、その後、13世紀になり、再び利用されたことがわかる。これにより京廃絶後の変遷を知る資料を得ることができた。
- (3) 時期不明の遺構のうち、斜行溝SD215、上坑SK229~236は重複関係から他の遺構よりも多く、方位が北で東へ振れることから、奈良時代以前のものである可能性が高い。遺物が出土せず詳しい時期はわからないが、第1次調査で、弥生時代の溝を検出しており、また、昭和50年に、調査地の北東、左京八条一坊九坪・十五坪において、奈良国立文化財研究所が行なった調査で、溝、上坑を検出していることから、一連の遺跡であるとも考えられる。以上のように、今回の調査で、前回迄の調査成果を補強するとともに、奈良時代以前、以後の推定地の様相の一端をも知ることができた。

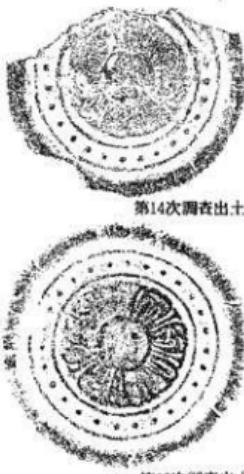


fig. 9 井戸S E226出土軒丸瓦
(平城宮7247 A種)

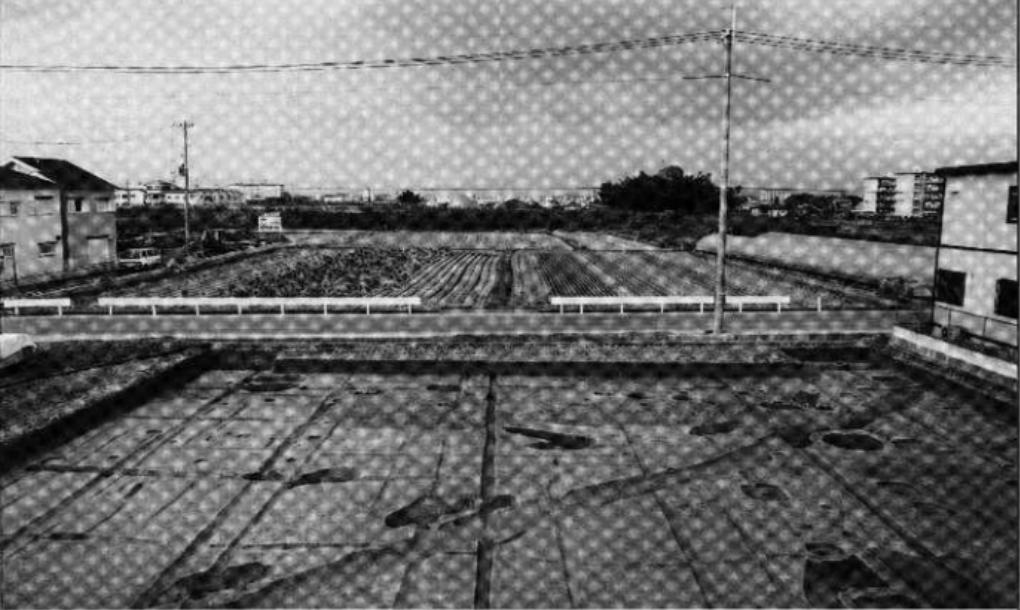
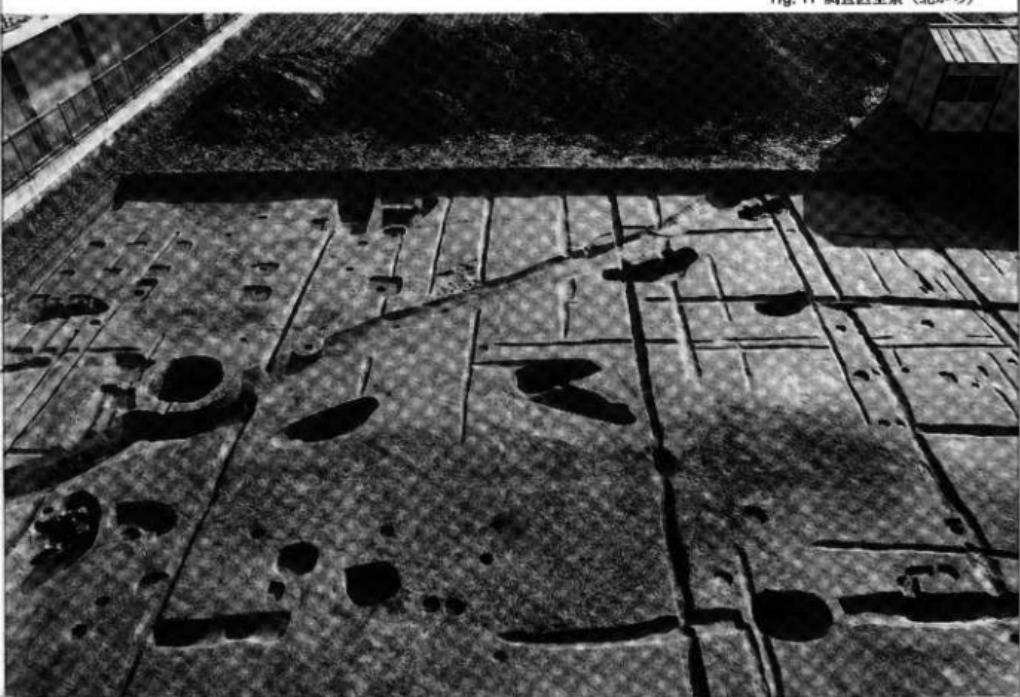


fig. 10 調査区全景（南から）

fig. 11 調査区全景（北から）



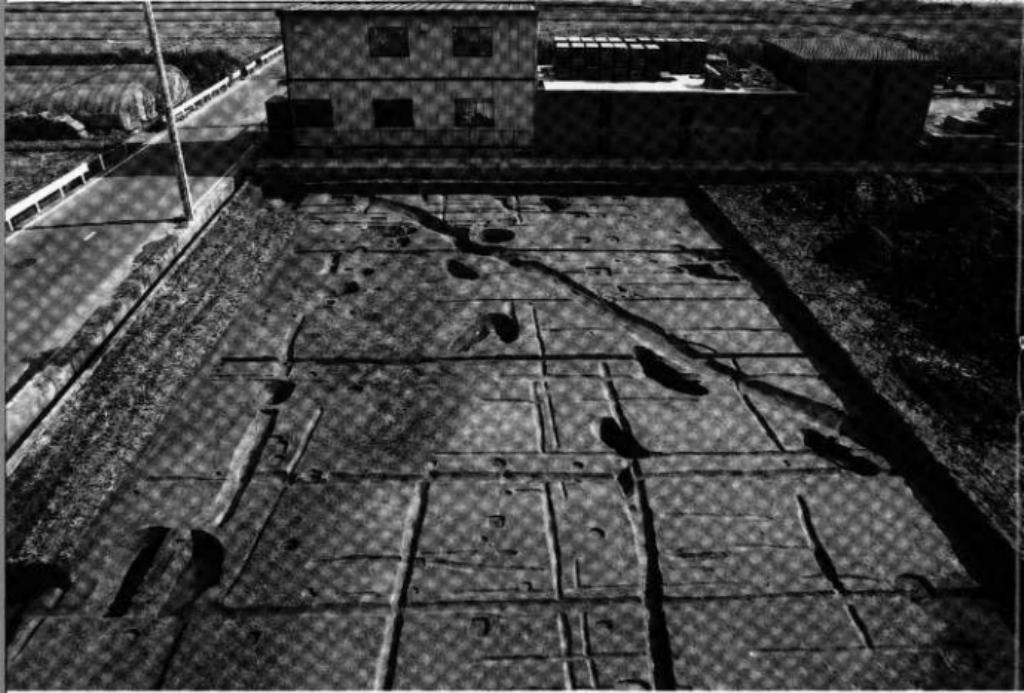


fig. 12 調査区全景（西から）



fig. 13 調査区全景（東から）



fig. 14 溝 S D215 (南西から)



fig. 15 北東拡張区八条条間路
南側溝 S D001(東から)

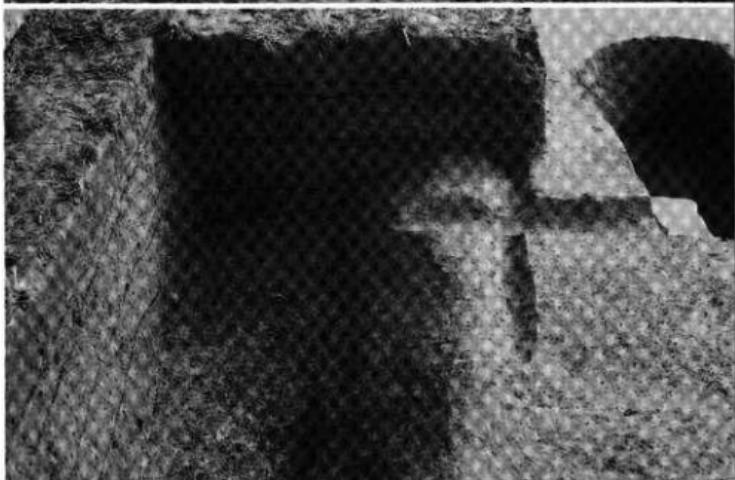


fig. 16 北西拡張区八条条間路
南側溝 S D001(西から)

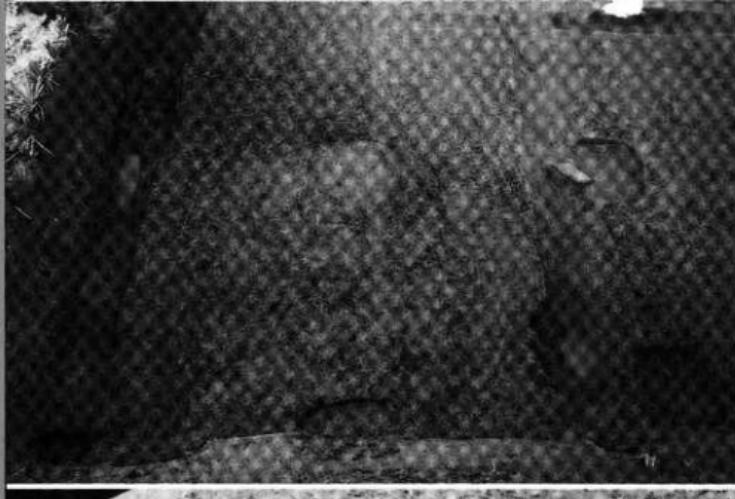


fig. 17 建物 S B208 (南から)



fig. 18 土坑 S K221 (北から)

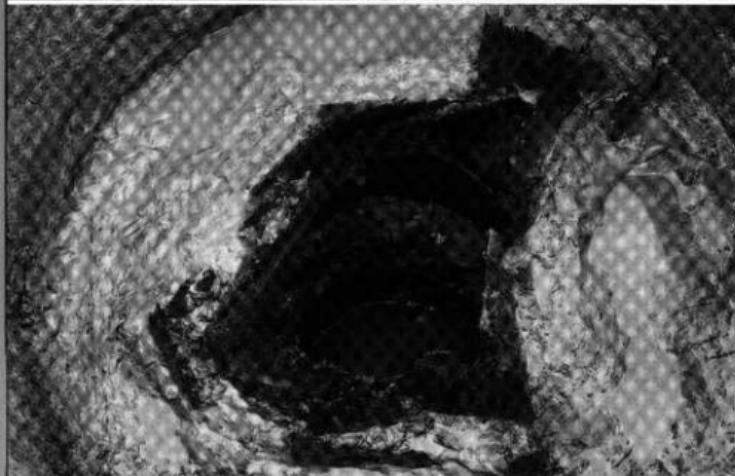


fig. 19 井戸 S E226 (東から)

日 限 票

この票の最後の日付がこの図書の返却日です。必ず期限日までに返却してください。

奈良女子大学藏書

99108095100x

平城京東市跡推定地の調査刈

第14次発掘調査概要

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

編集・發行 奈良市教育委員会

(豪農市二条木路南一丁目1-1)

$0742 - 34 = 1111$ (太代)

株式会社同人版印刷

(奈良市三条大路二丁目2)

$$0 \ 3 \ 4 \ 2 = 3 \ 3 = 1 \ 2 \ 2 \ 1$$

0 7 4 3 - 3 3 - 7 0 3 5

<http://www.ncbi.nlm.nih.gov> | <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez> | <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/blast>

奈良女子大学附属図書館



表紙 平城京市指図（浄土宗總本山知恩院所蔵『写経所紙筆授受日記』紙背）